

京まち工房



SUMMER
情報交流誌

no.

15

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

パートナーシップで取り組む 「まちなみ住宅」



「まちなみ住宅」設計コンペ 最優秀賞提案が決定！

前号でもお伝えしましたが、都市居住推進研究会とセンターの共催で実施していた本コンペは、京都市右京区の一戸建の住宅開発予定地を対象に、「地域資源を活かし、地域住民と協働して、地域のまちなみとコミュニティに貢献する」21世紀に相応しい住宅開発のあり方を考えることを目的として行われたものです。去る4月21日に審査委員会を開催し、公開による投票審査により最優秀賞の提案が決定しました。(詳細は7頁)

本コンペの特徴は、設計提案者が地域住民、購入意向者、開発事業者、そして学識経験者との交流、まちなみについての意見交換を行った上で提案して、作品の

審査は、地域住民、購入意向者、そして建売住宅を供給する側の開発事業者の3者が審査するという全国にも例のない、新しい方法で行ったことです。審査の結果、地域のまちづくりの文脈に沿った、多くの人が「住んでみたい」と思う、そして供給ベースに乗るバランスのとれた提案が最優秀賞に選ばれました。

今回のコンペは、本対象地の太秦における開発事業であるだけでなく、地域で取り組まれるまちづくりにつながる取組であり、住民や、設計者、開発事業者等の企業が共に取り組むパートナーシップによる開発事業の一つのモデルを示した取組であると言えるでしょう。

太秦学区 元自治連合会会長

濱中巳代治さん

私は、お互いに支え合い、安心して暮らせるまちづくりが一番大事だと思っていますし、また子供達が楽しく、思い出に残る暮らしができるまちづくりも大事だと考えています。お隣との関係を大事にする意味からも、コンペ対象地での取組、魅力的なまちなみが周辺に広がっていくことを期待しています。

理事長就任のご挨拶



財団法人京都市景観・まちづくりセンター 理事長 西島 安則

財団法人京都市景観・まちづくりセンターが平成9年10月に設立された当初から、理事長としてご活躍されました上山春平先生が、平成13年3月にご退任され、その後任の理事長として選任されました西島安則でございます。

これからの京都のまちづくりを考える時、人々が誇りに思い、国内外からも賞賛されてきた美しい町並み景観や、洗練された都市居住文化という、京都の都市特性を、維持し発展させていくという視点を大切にすることが、とても重要なことだと思っています。

そのためには、自らの暮らす地域について、そこに暮らすひとりひとりの方が、責任を持ち主体的に考え、企業や行政と智恵を出し合い、協力し合うことが、何よりも必要なことであると考えています。

このような考え方を基本として、本センターでは今日まで、住民の方々の主体的なまちづくりの取組を支援することを旨とした「地域まちづくり活動の促進」と、個別の土地利用の問題点を多くの関係者のネットワークによって取り組む「地域と共生する土地利用の促進」とを2本の柱として様々な活動を行っており、まちづくりへの関心の高まりや、地域コミュニティの活性化など、本センターの活動理念の広がりには確かな手応えを感じています。

さて、本センターは現在、元京都市立龍池小学校を事務所として活動を行っておりますが、平成15年春には、下京区の菊浜小学校跡地に建設される複合施設内に移転する予定です。

新たな活動拠点では、これまでの活動の拡充を図るとともに、その広さや新しい設備等を存分に活かし、これまでにはない新しい事業等にも積極的に取り組み、一層実りある活動を展開していきたいと考えています。

この京都を、後世の人々に誇りを持って引き継いでいくため、京都らしい景観の保全・創造と質の高い住環境の形成に向けたまちづくりに全力で取り組んでまいります。

今後とも、本センターの活動に、一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

あなたのまちづくり拝見

住民主体の取組を様々な観点から紹介するこのコーナー。今回は、小学校の廃校を契機に、先人が行ってきた自治のまちづくりの精神を受け継ぎ、様々なまちづくりの取組を展開され、その積み重ねを元に、京都初の地域協働型地区計画を策定された修徳学区の取組を紹介します。

職住共存のまち修徳学区

世帯数は約1,100世帯。概ね東は東洞院、西は西洞院、北は松原通、南は五条通に囲まれた修徳学区は、室町通の縦横関係を始め、扇、荒物、材木などの商工業の多い職住共存のまちとして発展してきました。そして、今も明治2年に開校された修徳小学校を中心に、人と人との繋がりを大切にしながら様々な活動が展開されています。

「社会教育プラザ 花と緑、健康と福祉の学区 修徳」

修徳学区では早くからまちづくりのスローガンとして「みんなで築こう楽しい修徳」を掲げ、地域活動を行ってきました。また、平成4年、小学校が廃校になった際には、新たなスローガンとして「社会教育プラザ 花と緑、健康と福祉の学区 修徳」を掲げ、修徳学区を中心に地域全体を教育の場としていくこと、建物周辺の緑化を進めること、高齢者のための福祉の充実などについて検討してきました。小学校跡地の活用には、このスローガンに基づいて、特別養護老人ホーム、デイサービスセンター、在宅介護支援センター、図書館、児童館、そして多目的ホールで構成される複合施設が建設されることになり、平成13年7月に完成する予定です。

この施設の総称をはじめ、ほとんどの施設の名称に「修徳」がついたことで「まちづくりにおけるまちの象徴が継承された」と、多くの地域住民は誇りに思っています。

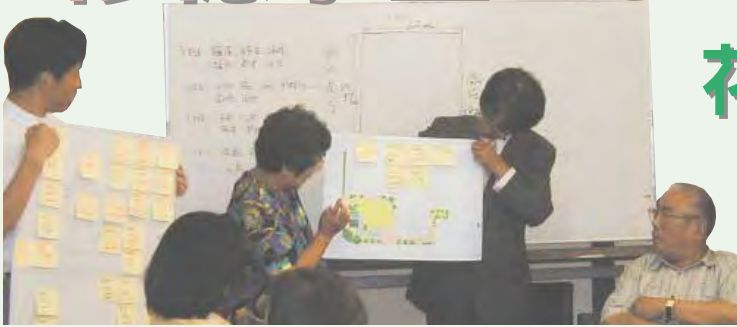
パートナーシップの公園「修徳公園」の計画

広報紙「修徳」を見ると、「みんなで考えた、みんなで描いた、みんなで創った」という印象的なフレーズが目飛び込んできます。これは、小学校跡地の一部につくられる都市計画公園の「修徳公園」に寄せる地域の思いを表したものです。「修徳公園」の計画案がつくられるまでには、自治連合会と自治連合会の内部組織である「まちづくり委員会」(平成11年6月設立)が中心になり、多様な取組が行われました。自分たちの修徳公園をつくるアンケート調査の実施、近隣町内会、高齢者、子供を持つ親、一般学区民とグループごとの意見交換。また、それらを受け、行政とのパートナーシップで行なった公園デザインを描く会(ワークショップ)など、平成11年12月から平成12年8月にかけて様々なプロセスを経ています。グルー



広報紙「修徳」

修徳学区のまちづくり



パートナーシップの公園「修徳公園」の計画

花と緑、健康と福祉のまちづくり

プロごとの意見交換の場では、単に希望を言うだけでなく、他地域での事例などを学習しながら客観的な検討も行ってきました。また、平成11年1月に実施した「わたしのまちに対する想いアンケート調査」の結果や、その際に寄せられた様々な意見も踏まえて、「公園デザインを描く会」でデザインの検討も行ってきました。情報を共有することを目的に、広報紙などによる学区民への報告も随時行っています。

みんなが納得した公園の計画ができたのは、こういった努力の積み重ねの結果です。そして、これらの活動は計画の検討だけにとどまらず、「(仮)修徳公園の安らぎを守る会」を結成し、近隣町内や利用者に不安を与えないよう、管理体制が整備される予定です。心の絆を実感する「芝生広場」憩いの場「東屋」、そして「滝」「せせらぎ」からなる公園が、行政に任せるだけでなく、計画づくりから今後の管理・運営をも、行政と一緒にやっていくという、まさにパートナーシップの公園として、複合施設とともに完成する予定です。

まちづくり委員会の平井委員長は、これまでのプロセスを振り返り、「ワークショップ方式をとったことで、多様な考えや感覚を持った人全員が、納得して一つの計画にまとめあげることができました。途中様々な価値観が衝突することもあったけれども、同じ『魅力ある公園』でも期待するものが人それぞれ違うということがわかったことも成果です」とおっしゃっています。

小学校跡地に建設される「複合施設」及び「修徳公園」は、内外問わず、人々が交流できる新たな拠点として、学区民をはじめ多くの人々に期待されています。

地域協働型地区計画の策定

「これまでの様々な取組により蓄積された学区民の声を、絵に描いた餅に終わらせたくない」との強い思いから、平成12年4月、学区の目標・まちづくりの方針として、地域協働型地区計画がまとめられました。

この計画では、これまでのまちづくりのスローガンである「社会教育プラザ 花と緑、健康と福祉の学区 修徳」の考えを今後ともさらに進めるため、「豊かなふれあい・活力ある交流のあるまちづくり」「美しく緑豊かなうらおいのある市街地環境の形成」を学区の目標として定めるとともに、地域の特徴を生かしたまちづくりの方針を定めています。この計画は、元学区という広範囲の地域において、まちづくりの方針を定めた地区計画で、これまでにない新しい取組です。今後、より具体的なまちづくりのルールがさらに深まることも視野に入れ、これまでのまちづくり活動を踏まえて地域での主体的なまちづくり活動を更に具体的に進める出発点となることを目指しています。

これまでの様々な取組を通して積み重ねられた経験が、地域毎の特色を生かしたまちづくりの基盤づくりとなったことと思われます。今後もこういった住民主体のまちづくり活動が、様々な地域に広がっていくことが期待されます。

地域協働型地区計画：平成10年4月に京都市が策定した職住共存地区整備ガイドプランに基づき、地域住民が主体となった職と住、新と旧が調和したまちづくりを実現していくため、身近な生活環境の課題に取り組むためにつくられた地区計画制度の積極的な活用を図り、段階的に運用するものであり、第一段階として、地域コミュニティの単位である元学区ごとのまちづくりの目標像を「地区計画の方針」として定めるものです。



修徳自治連合会
会長

篠原 實さん

123年もの長い間教育の場として学区民に貢献してくれた小学校地が、21世紀の初年度にこれからの修徳のまちづくりの中核となる要素を備えて生まれ変わることにしました。学区民の総意の結実は、多様な・多目的の身近な施設で、今後末長く修徳の名を後世に伝え続けてくれるでしょう。下京修徳ふれあい福祉会館の名称も学区民の今後のまちづくりを考えに入れた選名です。

修徳学区民がいつまでも学区地域を愛することができるよう、行政と緊密な連携のもと、安らぎと華やぎのまちづくりの拠点としてのその完成を願い、今後も頑張っ参ります。



修徳まちづくり委員会
委員長

平井常夫さん

これまでの取組により、人それぞれ様々な価値観があるということを知る良い機会になりました。そして、多くの人に出会うことができました。

まちづくりは町並みをつくることと言われていることが多いけれども、人づくりが一番。安心のまちづくりを行うには、様々な人との接点を見出し、人と人との関係づくりが重要になってくると思います。

これまでの様々な取組で得たことを生かし、この地域協働型地区計画を新たなまちづくりのスタートとして、新しくこのまちに来られた人も含めて一緒に取り組んでいきたいと思っています。

お知恵拝借~

あめのもり 雨森区「心の交流」のまちづくり

今回は、琵琶湖の北東部に位置し、「まちづくり」という言葉もないと言われている20年以上も前から様々なまちづくりの取組を行い、数々の賞に輝いた滋賀県伊香郡高月町雨森区のまちづくりからお知恵を拝借します。



まちづくり委員長の平井茂彦さん

雨森区は世帯数約120戸、人口約500人の農村集落ですが、内閣総理大臣「緑化功労賞」、自治省「地域づくり団体自治大臣表彰」、建設省「手づくり郷土賞」、「人と自然にやさしい川づくり大賞」、農水省「花のまちづくりコンクール最優秀賞」、国土庁「農村アメニティコンクール優秀賞」、「世界の街の花がざりコンクール最優秀賞」、「全国花いっぱいコンクール最優秀賞」等の数多くの賞に輝くまちづくりの地として知られています。

まちづくりは野球部から？

「まちづくりは昭和56年から始まりました」まちづくり委員長の平井茂彦さんは振り返ります。

雨森は江戸時代、朝鮮通信使に礼を尽くした対応を行い、新井白石と並ぶ儒学者として、韓国でも高く評価を受けている雨森芳洲のふるさとです。しかし、当時は、滋賀県内ですらそのことはあまり知られていませんでした。

村祭りや盆踊り以外でも若者の集まる場をつくらうとして始めた野球チーム。そこに集まった若者を中心に、郷土の先人を誇りとする数々の取組が始められました。この地道な取組は、昭和59年には「東アジア交流ハウス雨森芳洲庵」として実を結びます。

きれいなまちで迎えたい

施設の完成に伴い、「外から訪れる人をきれいなまちで迎えるために何かできないか」とそんな話し合いが持たれました。

高時山から清水を引き込んだ生活用水の座を、上水道に譲ることにより、清掃も滞り見捨てられていた水路に、鯉を放そうという意見が出されました。維持管理への不安など消極的な声もありましたが、始めてみると、外の人に喜ばれるばかりでなく、鯉を通じて地域の人との交流が深まりました。鯉のために清掃する機会も増え、水路はまちの魅力としてよみがえりました。

「もっとまちをきれいにしたい」とそんな思いは膨らみ、誰彼となく水路に沿って花が並べられるようになりました。花飾りは家から家に繋がると共に、創意工夫が凝らされ、水路の中にも広がり、地域の共通のしつらいとなりました。そして、錦鯉(住民が自費で購入)や、村の長老の手作りの水車とも相まって、まちはその表情の豊かさを増していきました。



季節の花々や水車、鯉に彩られた水路



恒例行事となっている韓国からの修学旅行生の受け入れ

心のもてなし

国際交流の輪の広がりも、外の人への心からのもてなしがきっかけとなって始まりました。

京都の神社仏閣、最先端の工場と合わせて芳洲庵を訪れる韓国からの修学旅行生に、少しでも喜んでもらいたいという思いから、区では餅つきなどに取り組み、歓迎していました。「雨森の地との交流を深めたい」、一番の思い出の地として語られる韓国側からの呼び掛けは、その後、修学旅行生のホームステイへと繋がりました。

最初は風呂や、食事、言葉の壁等受け入れ方法への不安もありましたが、一つ一つの相談を通じて地域の人との交流はかえって深まりました。受け入れる側の同年代の子供は、自らの地域を伝えるため、自らの地域を勉強することとなり、地域への愛着が深まりました。毎年、子供たちとの交流は恒例行事となり、今日までに1500名をこえる子供たちとの心と文化の交流が持たれています。

地域の目となり耳となる広報誌

雨森区では、ソフトボール大会や、大運動会、「夏休みふるさと塾」など、地域住民間の交流の取組も充実させてきています。とりわけ、880号を誇る毎週発行の広報誌「区報あめのもり」は、身近な顔の見える記事を中心に編集され、地域住民の目となり耳となり地域の絆を深める役割を果たしています。

こうして、一年を通じて、お正月の獅子舞、越冬地からの鯉や水車の帰還、高時川の川風にたなびく500匹の鯉のぼり、韓国の子供たちとの心の交流、ソフトボール大会や、大運動会、地域を飾る花々のしつらいなどの様々な営みが、季節の移り変わりを楽しむかのごとく、一つ一つ丹念に取り組まれています。

地域の歴史や文化、人を大切にし、その魅力や持てる力を上手く引き出し、楽しみながら地域内外の人との交流を深めることにより、地域への誇りと愛着を高める…。そんな魅力的な取組が雨森の地域では今後も繰り広げられていくことでしょう。

京町家の保全・再生の事例

～暮らしのおすそわけ～

「S邸」(中京区)

買い物客や観光客が行き交う繁華街のど真ん中に、ぱったり床几が目を惹く本2階の京町家がある。戸口を彩る植木の花に、毎日かかさず水をやる女性。ここにご夫婦で暮らす。

以前は下京区の町家に住んでいた。昭和28年、中京に住みたいという父親の希望があり、少し大きなこの町家を新聞広告で見つけ手に入れた。幼子を抱え、初めて足を踏み入れた時、想像できない奥行きや広さと、思いがけない明るさにびっくりしたという。開け放たれた戸口から、涼やかな風が、通り庭と火袋、さらに奥へと駆け抜ける。表から店の間、玄関、中の間、奥の間と4間が続き、



さらに廊下が離れとその奥の蔵へとつながる。2階も4間、表から奥庭へ風が流れるのがわかる。夏は涼しく、冬は寒い。冬の寒さもそのうち慣れ、夏の涼やかさを楽しんでいる。「襖を閉めれば小さな部屋として使えるし、取り外せば広々とした空間が手に入る。大勢来られても大丈夫。重宝しています。孫5人が遊びに来て、それぞれ好きな場所で寝ています。」

母屋はその昔、株屋だった^{あまじ}が総檜でつくったと聞く。元々は虫籠窓のある中2階の町家だった。離れはお茶の先生が主になった時に、茶室として造作されたという。棟札から大正9年に建てられたものらしい。母屋の2階の間は、この時水屋を備え、稽古ができるようしつらえられた。その後も次々と主が代わる。家族が移り住んだ時、前の主が2階を使っておらず、ひどく汚れていたのを覚えている。

常に手をいれ、修繕を繰り返してきた。台所のおくどさんは取り除き、土間のままにしてすのこを敷いた。毎

日の上がり下り、足腰が丈夫になっていることを実感する。トイレの水洗工事はオイルショックの最中だった。通り庭は掘り返す必要があり、全面に敷き詰められた石は捨てるつもりにしていた。「少々お金はかかるが、家のために敷石は元にはめ込んだ方がよい」。大工の棟梁の言葉に従い現在の姿がある。玄関横の通り庭のトイレは、奥にある不便さから、祖母の反対を押し切って設けた。トイレや風呂など水廻りの設備は、使いやすいよう何度も改造。現在も「どうしよう」と、2人で相談しながら手を入れている。店の間に目をやると、手先が器用なご婦人の手工芸品が飾られていた。至る所に主と家との関わりが垣間見られる。

奥に進むと、1階の座敷に5月人形が飾ってあった。先日は3種のお雛飾りが並んでいたという。その雛段にはご婦人手づくりの台所の模型が飾られた。



通りすがりの観光客を招き入れたこともある。客人は何よりも、町家のつくりや敷居に心を惹かれた。格子の向こうは外からはうかがえない空間が広がる。「これだけ喜んで帰ってくればよかった」。この空間を味わってもらいたい。昔は民宿をやるうと考えたが、消防法に適合するためには大幅な改造が必要であった。形が全部変わってしまう。それでは元も子もない。今は「せっかく京都に来られたからには、せめて家の中ぐらい見てもらえたら。何か役立てれば」と温かい笑顔で人々を迎える。

最近、屋根瓦を葺き替え、表の木戸も直した。隣近所がきれいになり「うちもしないとイケないな」と思ったという。周辺の人々は郊外の家に移り住



んだ。格子戸の並ぶ家並みは、いつしかビルに姿を変えていった。だんだん少なくなる町家を見ると、余計に「もったいない」と思うようになった。「この家だけはなんとか維持していきたい」。自分たちの後は嫁いだ娘達に委ねるしかない。先日、家の天井も全部きれいにやりかえた。「ボロボロの家を残したら負担になる。手入れしてきれいにさえしていたら、何とか残してくれるかと」。このつくりを活かしてほしい。「多少さわってもいいから、知恵を出しみんなで助け合って維持してほしい。手放したらこういう家は2度と求められへん。そう伝えてますが、どうなることやら・・・」。娘婿は「畳敷きがいい」と、「日本づくり(木造畳敷き)の家を新築した。孫は絨毯を片付け、通り庭の洗いを手伝い、次の約束をして帰る。

自ら愛着を持ち、評価しながら暮らす姿に感じ入る人々がいる。「周りの人が応援してくれはる。そういう方がいるから、残しといて良かったなと」。通りと一体となった京町家での日々の暮らしを味わい、訪れる人々におすそ分けをする中で、さらに暮らしを楽しむ。主の心意気と外との応答が、京町家での暮らしを一層惹きたてているのを感じた。ぱったり床几のさりげない演出が、通りの目を楽しませる。

ぱったり床几：元々商品を並べるためにつくられた縁台のようなもの。通りに面してつけられ、折りたためるようになっている。

火袋：通り庭上部の吹き抜け空間。台所の煙を抜いたり、火事の際、隣家への延焼を防ぐ。

地域まちづくりセミナー

～新たなまちづくりに向けて～

地域まちづくりの契機になることを目的に開催している「地域まちづくりセミナー」。平成12年度は、東山区を対象に、計5回のセミナーを開催してきました。7学区約50名の地域の方々の参加を得、様々なまちづくりの事例からまちづくりの意義や方法を学ぶとともに、ボランティアで参加した専門家や市職員とともに学区ごとのグループに分かれ、自分たちのまちの魅力や課題などを場所、人、活動等の様々な視点から振り返り、「誇りを持ち、安心して生き生きと住み続けられるために」まちの資源を活かしてどのようなことが実践できるか、議論してきました。最終回には、これまで議論してきた内容を学区ごとに発表し、今後のまちづくりについて参加者全員で考えました。

今回は、最終回のセミナーで各学区から発表された内容を簡単に紹介します。



まとめの作業の様子

有済学区(ゆうさいがっく)

有済小学校の生徒数は50名弱と非常に少ないが、地域ぐるみですばらしい学校、すばらしいまちをつくることで、有済小学校に通いたい、このまちに住みたいと思ってもらえるようなまちづくり活動を行っていききたい。

六原学区(ろくはらがっく)

5年後、10年後、20年後もこのまちに住んでいて良かったなと思えるようなまちづくりをしたい。そして、地域のふれあいの中で子供たちにも地域の魅力を伝えていけるようなまちづくりをしたい。

清水学区(きよみずがっく)

清水学区にはまちのことを考える様々な組織が既にある。そういった組織のネットワーク化を図り、組織の枠を超えて、商業という視点だけではなく様々な視点から地域づくりに取り組んでいきたい。

貞教学区(ていきょうがっく)

自分たちのまちのことは知っているようで知らないことがたくさんある。まちの資源を発掘し、より多くの人と共有してまちの資源を活かしたまちづくりを進めていくことが大切だと思う。その第1弾として、まちの再発見を目的とした「宝のまち貞教マップ」を作成してみたい。



各学区でまとめられた成果の一例

修道学区(しゅうどうがっく)

観光ということだけに目を向けるのではなく、住民にスポットを当て、様々なまちの資源を活かしたまちづくりを、小学校が統合される貞教学区とともに行いたい。そのためには、これまでに行ってきたふれあい祭りのようなソフト面の活動というのは非常に大切。

一橋学区(いっきょうがっく)

まちづくりは、人づくりがスタート。人との出会いを大切に、声を掛け合えるまちにしていきたい。そして、このセミナーで学んだことをこの場だけで終わらせるのではなく、地域の方々にも広げていきたい。

月輪学区(つきわがっく)

月輪学区の散歩コースの設定や、東福寺もみじ祭りにあわせた全学区あげてのイベントの開催、月輪学区の様々な人を講師に講演会を開催するなど、まちの資源を活かした様々な活動ができるのではないかと。そして、それを夢としてとどめるのではなく、現実になるように努力したい。



発表会

このように、学区ごとに地域の魅力を再発見し、地域の実情にあった様々な議論が展開されました。このセミナーを通じて、他学区の人、立場の違う人など様々な人々との新たな交流が生まれました。そして、セミナー終了後、「まちを再認識する勉強会を開いた地域」、「まちの再発見を目的とした、まち歩きを企画している地域」など、新たなまちづくりが始まっています。

「まちなみ住宅」 設計コンペ

「まちなみ住宅」設計コンペでは、「まちなみウォッチング」及び「地域交流会」を通して、建売住宅のあり方に対する創意工夫に満ちた、110もの提案が全国から寄せられました。これらの提案は、4月3日(火)～9日(月)に元京都市立龍池小学校の2階講堂に公開展示し、約400名の来場がありました。

4月8日(日)の「事前審査委員会」において23作品を選定し、4月21日(土)京都市立太秦小学校の体育館で最終審査を行う「審査委員会」を開催しました。

審査委員会では、まず設計提案者から、作品に関する発表があり、審査員は、それぞれの評価する視点についての意見交換を行いました。更に、提案に対する設計者への質疑応答を経て、審査を行いました。

審査は、公開による投票で行い、審査した1回目の投票では、23作品から10作品を総得票数で選定、2回目の投票では10作品から4作品に絞り、3回目の投票で最優秀賞1点と優秀賞3点を決定しました。

最優秀賞に選ばれた作品は、「地球に優しい住まい、進化した現在の町家、気楽なコミュニティ」の3つをキーワードとして、各敷地にテーマ性のある住宅の提案がされています。(表紙参照)

この提案は、事業主により事業化されることとなっており、本コンペの目的である「地域資源を活かし、地域住民と協働して、地域のまちなみとコミュニティに貢献するまちづくり」は、これから具体化されていきます。むしろこれからが「まちなみ住宅」づくりの始まりともいえます。

地域住民、購入意向者、開発事業者、創意工夫に満ちた提案をいただいた設計提案者、コンペ全体を支えた運営委員の学識経験者、そして土地を提供した事業者及び本コンペに関わった全ての人の努力とパートナーシップによって、「まちなみ住宅」設計コンペは成功することができました。

今後は、様々な地域のパートナーシップによるまちづくりへとつながっていくことを目指して提案作品集の発行やシンポジウムを開催し、今回のコンペの意義と成果について、積極的に情報発信を行う予定です。

提案作品集の入手方法

郵送希望の場合は、現金書留にて、提案作品集1冊につき

代金(1,000円)

郵便切手(390円分)

送付先を明記したもの

を同封の上、事務局まで送付してください。

「まちなみ住宅」設計コンペ事務局
(財)京都市景観・まちづくりセンター
tel:075-212-4031 fax:075-212-4047



各賞受賞者

最優秀賞

林 史朗氏 他1名
(E&A設計株式会社)

優秀賞

上田 修氏
(上田設計室)

満野 久氏 他9名
(株式会社設計事務所ゲンプラン)

石本幸良氏 他4名
(株式会社地域計画建築研究所)

『まちづくり交流』

「でまち倶楽部」

「でまち倶楽部」は、河原町今出川の周辺地域「出町」を舞台にして、様々な活動を行っています。

地域に「楽しく、やわらかく」関わり、地域から「深い信頼」を得ている活動の様子を紹介します。



上御霊祭り

『でまち倶楽部』のはじまりは？

出町のまちづくりに関わる人たちが増えてきたのは、鴨川河川敷改修計画(京都府)を住民参加で行うことになった頃からです。以前から関わっていた専門家に加えて、出町のまちづくりに関心を持つ人が多くなってきました。でまち倶楽部は、出町のまちづくりに「やわらかく」つながって行くグループとして、1998年の夏頃に発足しました。

どんな活動をしているのでしょうか？

「でまち倶楽部」は、1年を通じて、出町界隈で行われる地元のイベントや事業にいろんな形で参加しています。主なものを拾い集めてみます。

5月には、上御霊神社の御神輿の担ぎ手として毎年参加し、今では「神輿会」の主要メンバーにもなり、祭を通じた地域づくりにも知恵を出しています。

7月の「七夕祭り」には柵形通りのアーケードの一角に「でまち倶楽部」のコーナーが出ます。倶楽部のメンバー手作りの竹笛(素人とは思えない出来上がり!)が子供たちに人気です。メンバーは浴衣姿で七夕祭りを楽しんだり、祭りのTシャツをデザインしました。でまち倶楽部は、地域のお



七夕祭り

祭りに迎え入れられています。

9月の「エスプラナード・フェスタ」(鴨川河川敷での地域のお祭り)では、「出町探検おもしろ発見ゲーム～歩いて・見つけて・ピカッ～」というユニークな取組を提案しました。

やり方は誰でもできる簡単なもの。ポラロイドカメラを片手に持って出町界隈を歩きます。そして、「これはっ!」と思ったものをその場で撮影して、その理由を書き止めます。まちの資源を楽しみながら見つける



ことができます。11月の「京極文化祭」には、発見した地域の資源を展示発表して、多くの方に伝える取組も行っています。

『でまち倶楽部』の“ヒミツ”!

「でまち倶楽部」は、地域に「楽しく、やわらかく」関わっていますが、その活動の秘密をまとめました。

1つは、メンバーが「いろんな地域」からやってきているということと、「いろんな専門家」がいるということです。もちろん出町の方もメンバーの一員です。メンバー同士は、メーリング・リストで情報交換をして、様々な取組の企画をしています。

2つめは、地域の人々との関係が「ゆるやかでやわらかい」し、「深い信頼がある」ということです。地域の信頼感の厚さを最もよく示しているのは、自治連合会のまちづくり委員会の

「アドバイザー」として関わっているということにも現れています。

3つめは、自主的・自発的に集まっているグループであり、活動の自由さがあるということです。地域の取組に参加するだけでなく、自分たちも集まろうということで、「出町サロン」も始まりました。また、活動の広がりということで見れば、地域に発足した「出町ホテルの会」では、設立当初から倶楽部のメンバーも積極的に活躍し、出町付近の鴨川にホテルを呼び戻す活動を継続されています。



「出町ホテルの会」鴨川五感散歩 冬編

これからどんな風に!

「でまち倶楽部」に関わった動機を、専門家として参加している谷口さんは「いごちのいいまちに見えたり、大手をふって遊べそうだと思えたから」と語り、それを受けて地元まちづくり委員会の巨さんは「自分のところのないものが欲しかった。この地域は昔から割といろんなものを受け入れる気質があった」と答えました。この二人の会話から、「でまち倶楽部」と地域の関わりの未来像が見えてくるようです。地域外の人々の力を積極的に取り込むことが地域の活性化につながり、地域の人も元気になり、地域の魅力が増していくのではないのでしょうか。

でまち倶楽部

U R L : <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/dmtesp85/index.html>

E-MAIL : dmtesp85@mbox.kyoto-inet.or.jp

まちづくり提案

京都のまちづくりのために、 民間と行政の思いから生まれた研究会

京都には、道路が狭いことなどから、法規制上の関係で、改修や更新がままならない住宅や、有効な活用を図れない敷地等が、袋路を中心に少なからず存在しています。また、将来のまちづくりに課題を残すような住宅開発に対する懸念の声も少なくありません。これらのことは、全国一律の法規制や取扱い等から生じているものも多く、京都のまちづくりを考えていく上で、そのあり方を見つめ直すことが重要であると言われていました。

今回は、そういった様々な課題を解決することによる「誰もが住みやすい京都の街づくり」を目指し、民間の開発事業者や建築家、行政関係者の方々の発意により発足した「都市居住推進研究会」について紹介します。



お話を伺った卯田代表運営委員

パートナーシップによる取組

この会の特徴の一つとして、会員(約220名)を中心に開発事業者や建築家、学識経験者、行政関係者等が、パートナーシップを組んでいる点と、そのことが上手く活かされている点が挙げられます。

様々なテーマについて学習を行う定例会、研究活動を行う小委員会、より深く課題について検討するワークショップ等の活動は、内容に応じた様々な方の連携により取り組まれます。話題提供者や講師、助言者、参加者として、現場で得られる生の情報や、豊富な知見、様々な経験等に基づく意見交換を通じて、それぞれのテーマは、深く研究・分析され、課題解決への道筋を、より一層明らかにしていきます。

都市居住推進研究会 (会長 巽和夫 京都大学名誉教授)

様々な切り口からの新たな提言

この会のもう一つの特徴として、そういった研究成果を、課題解決に向けた具体的な「提言」としてまとめ、市や国等の行政機関に提出していることがあります。

平成8年7月の「第一次提言」では、京都市に対して、袋路について、障害物の設置の禁止や建替え時の防火性の向上等による居住環境を高めるための提案を行っています。

平成9年11月の「第二次提言」では、国に対し、地域の魅力を高めるための住民の主体的な取組によるまちづくりルールの策定や、京町家等の木造の多い都市としての特性を生かすための地域の防災能力を考慮した防火規定等の見直し、等の提言を行っています。

さらに、平成11年8月の「第三次提言」では、道路を始めとする都市基盤の形成過程から市街地を、「歴史的」「戦前土地区画整理」「スプロール」「開発予定」の4つの地域に分類し、

それぞれの特徴に合わせた開発の誘導のしくみづくり、低層住居専用地域での最小宅地規模(80㎡)の設定、等の具体的な提案を行っています。従来にない切り口から地域を捉え、その実情に即した提案を行っていることは、画期的であるとともに、極めて意義のあるものだと思います。

平成13年6月には「第四次提言」として、京都市に対して、都心街区的持つ地域資源を活かした「誰もが歩きたくなる京都」を目指すための提言を行いました。電柱の地中化等による環境の整備や、まちなみの調和を図るため、高さ制限の20mへの引き下げ、壁面線の指定、建築物の一階への店舗の設置による「町家街区」の整備・誘導等の具体的な提案が行われています。

展開する新たな取組

平成12年12月から、都市住宅の供給手法の一つである建売住宅のあり方を見直す新たな取組として、「まちなみ住宅」設計コンペが取り組まれました(当センターとの共催、詳細は7ページを参照)。実際の宅地開発予定地を対象地とすることにより、リアリティの高い取組に繋げることができたことは、開発事業者の会員がいるこの会の特徴が活かされた結果と言えます。

この取組は、建売住宅の供給にあたり、事業者が、地域住民や、購入予定者、更には設計提案者とともに進める全く新しい方法として、今後の住宅供給の様々な可能性を指し示したものとなりました。

代表運営委員の卯田隆一さんは、「開発事業者、学識経験者、行政職員等が互いの専門分野を活かしながら意見を交流することで、これまで気付かなかった視点から課題を見つめなおすことができ、解決への道筋が見えてきているのではないのでしょうか。」

取組を通じて、開発地の周辺も意識したまちづくりに関心を持った開発事業者が増えてきていることも感じます」と話されています。

様々な主体とのパートナーシップによる活動がさらに広がり、「住み続けたくなるまち京都」の魅力が高まっていくことが楽しみです。

U R L : <http://www.tjk-net.com/>
E-MAIL : office@tjk-net.com



第18回定例会の様子

ニュービジネスの動向



木村染匠株式会社

代表取締役社長 木村 信一さん

どのような事業をされているのですか？

京友禅を2枚の硝子に挟み込んだ「京友禅硝子」を開発し、製作販売しています。京友禅を挟み込む時に使用する樹脂が繊維に染み込んで透明度が増し、京友禅の新たな美しさが表現できたように思います。また、汚れや退色にも強く、長い間、京友禅の美しさを保つことができます。

染匠とは？

染匠という仕事は、お客さんの注文を聞き、それに応えるのに最も適当な職人の組み合わせを選び、満足していただける京友禅をつくりだすのが仕事です。簡単にいうと京友禅のプロデューサーのような仕事です。京友禅のすごいところは、それぞれの工程が専門化され、極められている点です。そして、注文に応じて、どんなものでも作り出すことができる仕組みがあり、染匠はその仕組みを上手く生かし、魅力的なものを作り出すことができる仕事です。

なぜ京友禅硝子を？

2代目として自然に会社に入り、改めて染めの仕事を見て、職人の技に魅了されました。

「のり置き(染料がにじみ出さないよう下絵の線に細くのりを置く作業等)の工程の一本の線にも職人のいろいろな工夫や経験、先人からの知恵が息づいているんです。良いものをつくりだすため、自らの工程にこだわりをもつことはもとより、後の人がしやすいよう考えて、作ります。次の工程の人は、そんな思いを大切に、また、次の人に仕事を託していきます。

そんな京友禅が着物だけに使われていることがもったいないと思っていました。

そんなおり、バリ島でジャワ更紗のタペストリーを見て、一反単位での販売でなく、タペストリーなどとしてカットして売るアンテナショップを神戸に開きました。新しい試みが話題を呼び、マスコミの注目も浴びました。店舗のディスプレイ用や、料亭のランチョンマット用と

このコーナーは、新しく立ち上がった、もしくは企画段階にある新発想のビジネスの動向についてのインタビューによる紹介です。

か、いろいろな用途に使われて喜んでいただきました。

その時の様々な人との出会いにより、京友禅の価値を再認識しました。大手洋酒メーカーからラベルのデザインの相談を受けた時、一流の芸術大学を卒業したデザイナーでも、日本独自の着物の作られ方は学ばれていないことを知りました。様々な業界から相談を受けるたび、京友禅の仕組みのすごさを再認識し、こんな技能者の集団は世界のどこにもないと確信しました。

その後、アンテナショップは、「お客さんの注文に応じて、最高のものを作り出す」という、うちの本業としての京友禅のあり方とは異なること等の理由から、取りやめることとしました。

そんな時、和紙を挟み込んだ装飾用ガラスと出会いました。「和紙の代わりに着物地を入れてみよう」そんな発想から、商品の開発が始まりました。

今後の展開は？

「京友禅硝子」を活用する商品の共同開発の話があったとき、提案用に20枚のデザインの下絵を持参したところ、提携先が困惑してしまいました。デザインの世界ではそれだけ準備すれば数百万円が請求されるのですが、京友禅の世界では、無料で提案するんです。その仕組みを大切にしたいんです。

伝統工芸を継承するために保護策がとられることが多いのですが、ビジネスとして成立していないものは何時かは消えていくように思います。保護しないと技術が途絶えるといいますが、途絶えた技術も、必要となり復興された例はいくつもあります。

京友禅の職人や技術、仕組みを継承発展させるためには、ビジネスとして成立させることが最も大切です。そのためにも、多くの人に「京友禅硝子」を知ってもらいと共に、京友禅の仕組みを上手く生かした様々な商品開発を行っていきたくと思っています。



私と京都



社団法人 京都府建築士会会長
井手 正己

疎開道路と疏水

京都の市内でも戦争の空爆の延焼に備え防火帯を設けるため、建物が強制的に撤去された。その殆んどが今、市内の主要幹線道路となっている。御池、五条、堀川等であり、子供の頃には「疎開道路」と呼んでいた。

案外知られていないのが「紫明道路」である、私には「御池道路」と同じくらい思い出がある。前者は撤去前の戦中、後者は戦後である。「紫明」は東を賀茂川堤より西は堀川まで、他の疎開道路と比べて変に蛇行している。現在は中央にグリーン帯を持つ比較的交通量の少ない静かで地味っぽい道路である。

源をただせば「びわこ疏水」から繋がっている。琵琶湖からの第一、第二疏水が蹴上で合流し本線と第一分線に分かれ、第一分線が南禅寺銀閣寺 高野川を越え松ヶ崎、下鴨を通り賀茂川を潜って顔を出してい

た。ここが「紫明道路」の東端である。疏水に沿って南側に建ち並ぶ家屋が強制撤去された。私の暮らした家も今は道路となっている。川なりの道なので多少蛇行している。私は岡崎疏水端の病院で生まれ、物心つくまで上京区下総町で暮らしていた。家の北側に汚い細い川が流れていた。大人達はこのドブ川を「ソスイ」と呼んでいて私も真似て「チョスイ」と言っていた。近隣の家でタマゴか食用か、「あひる」が数羽飼われた。「チョスイ」は彼等の水場であり「あひる」は幼児達の友達であった。ある日「あひる」を追って疏水の泥上げの中に足を踏み入れたのが原因で親指の爪が化膿した。医者は殆んど戦地に行き、唯一帰還中の外科医に通い治療したが、薬もなく、麻酔もなく、荒療治軍医さんの手荒いガーゼ交換に泣いていた。爪根の組織が壊れ、以来まともな爪は再生せず現在でも風呂上りなどに長年付き合ってきた爪を眺めると、決して良い思い出ではない。

日本列島は少雨の時には渇水状況になり取水制限が起こる。しかし京都は日本一の「水がめ」のお陰で決して心配はない。琵琶湖から都に水を取ることは古くは平清盛以来の念願であったと聞いている。明治23年に北垣知事、田辺朔郎、島田道生をはじめ多くの人々の英断と知恵と技術で第一疏水が完成した。京都市民は以来永々とその恩恵を蒙っている。勿論私もその一人であり爪を眺めての

不快さなど問題ではない。

後者の疎開道路は「御池道路」である。小学生の頃はあちこちに残留の蔵跡の「土やま」を避けて三角ベース野球に明け暮れていた。いつのまにか市役所前に立派なテニスコートが数面出来上がった。背の高いフェンスで囲まれている。進駐軍専用である。接收中の京都ホテルから将校達が出てきては毛の生えた白球で心地よい音を響かせている。外では悪童がフェンスに顔をくっ付けて「僕等も大きくなったらこれやろうや！」と夢のように眺めていた。この強烈な刺激は約10年後に現実となり、今もテニス好きな私となっている。御池通りにある中学校に通う頃には「土やま」「コート」はなく、広い地道に2車線だけの粗悪な舗装の道路が出来た。雨降りに車が走ればすぐに流れて補修。走る車は階級を示す星印のついた米軍の乗用車が殆んどで四条烏丸の丸紅(GHQ京都) 植物園(将校官舎) 京都ホテルへの通り道なのだろう。この道を通った高校時代にコンクリート舗装となり細い^{クマキ}櫨も植えられた。年月を経て立派に成長したが残念なことに最近地下鉄に蹴落とされて晴れの舞台から姿を消してしまったが、今、二代目が整備されつつある、地下鉄も「疎開道路」も櫨も我々より遙かに長寿なのである。今日まで「疎開道路」とともに暮らしてきた私には、「どうか疏水同様、子孫に永々と価値を持ち続けて欲しい」と願うばかりである。

《センター解説アワー》

IT革命とまちづくり

IT(情報技術)革命により広がったインターネットは、その活用の仕方により、まちづくりの取組を支える重要な役割を果たしていくことも予想されます。

e-メールは情報の受発信が容易でコストも安く、きめ細かな地域情報を迅速に伝えることが可能です。地域情報を満載したホームページは、知りたかった地域情報へのアクセスを容易にするとともに、地域住民の情報の共有や、地域の魅力の内外への発信を通じて、誇りと愛着を高めることにつながります。また、インターネットを活用した電子会議などは、様々な市民がまちづくりに関わる際にネックとなる時間や場所等の制約を取り払い、意見交換や打合せ等への参加が容易になるでしょう。

しかし、インターネットの活用にはまだまだ課題が多くあります。パソコン等の情報端末のない人や、扱えない人等のいわゆる「IT弱者」への対応です。「IT弱者」を阻害しないため、情報端末の普及の拡大と、操作性の向上が求められています。また、インターネット以外の方法による情報の受発信の仕組みを用意することも重要です。

さらに、情報が瞬時に広がるため、個人情報の扱いや、誹謗中傷や公序良俗に反する使われ方等の悪用に対する対応も必要です。

そして、何よりも大切なことは、「顔の見える形での人の交流による信頼関係」こそが、まちづくりを支えるものであり、インターネットはそれを補う「道具の一つ」として捉えることのようにです。

センター語録

京都には、様々な分野別のセンターがありますが、最近そのセンターの職員の方と話す機会がありました。京都市国際交流会館を訪れた時に印象的だったのは、「10周年の時に、センターの役割をみんなで徹底的に議論しました」という話でした。その結果、「市民へのパイプ役に徹しよう」「主役は市民、センターは支援するスタンス」ということが改めて明確になったとのこと。京都市女性総合センターでは、「役割を特化した運営を考えています」と現在の取組の方向性を教えていただきました。「図書情報室は最初は地域図書館のような感じで、多方面の図書を整備していましたが、今は、女性問題に焦点を絞っています」とのことです。景観・まちづくりセンターも発足

(平成9年10月)して3年8ヶ月になりました。「まちづくり」という言葉もいろんな場面で使われることが飛躍的に増えてきました。今、センターでは、2年後の新施設への移行(下京区の菊浜小学校跡地での社会福祉・市民活動総合センター(仮称))に向けて様々な課題を検討しています。「センターの役割」についても改めてみんなで議論しています。先に発足した前述のセンターにおいても、同じように真剣な議論がなされました。わたしたちも、たくさんの方々の意見を聞きながら、センターの役割が最大限に発揮できるように検討を重ねたいと考えています。多くの皆さんからのご意見をお待ちしています。

(景観・まちづくりセンター事務局 H・N)

文字を大きくしました

ニュースレター「京まち工房」はセンターの広報誌として、地域まちづくりに関するトピックや様々なまちづくりに取り組む団体の皆さんの情報等をお届けしてきました。常に親しみの持てる記事を、分かりやすくお伝えするよう心がけてきたところです。その一環として、このたび、ページ数を8ページから12ページに増やし、これまで以上に読みやすい紙面となるように、文字を大きくすることと致しました。

皆さま方からの御意見や御要望をもとに、より一層、親しまれ、読みやすく、まちづくりにお役に立つ紙面づくりを目指し、これからも全力で取り組んでいきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

センターからのお知らせ

賛助会員の募集 (平成13年度分)

京都のまちづくりに貢献したい！
センターの活動を応援したい！
そんなあなたの熱意をお待ちしています。

[特典]

- ・ニュースレター(年4回・季刊)の送付
- ・ニュースレターでの活動紹介
- ・シンポジウム、セミナー等への優待

[年会費]

個人1口:5千円 団体1口:5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

4コマ漫画はお休みをさせていただいております。

京まち工房 ホームページ

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/>

センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。皆さんからのまちづくり情報もお待ちしています。



(財)京都市景観・まちづくりセンター

“京まち工房”案内

〒604-0846 京都市中京区両替町通押小路下る金吹町
452(元京都市立龍池小学校内1階南側)

TEL 075-212-4031
し えん さんかひとづくり
(支援・参加・人づくり)

FAX 075-212-4047

e-mail: kyoto-ws@mbox.kyoto-inet.or.jp

相談の受付等

月～金(祝日を除く)の9:00～17:00
来所される場合はなるべく事前にお電話ください。
なお、駐車場はありませんので地下鉄等をご利用ください。

